札幌大学総合論叢　第22号（2006年10月）

〈論文〉

# 日英語間の複数表現
## ——名詞にどのように関わるか——

浅　見　吏　郎

## 1. はじめに

名詞は，性（gender）・数（number）・格（case）が文に制約を与える。数（number）は名詞に関連する文法的カテゴリー（石綿・高田 1990）の一つである。

英語では主語が単数（singular）か複数（plural）かによって，使用する動詞の形が決定する[*1]。

(1) a. {A student stands / Two students stand} at the window.
　　b. {A student is standing / Two students are standing} at the window.

しかし，日本語では主語の数に動詞が影響されることはない。

(2) {一人／二人}の生徒が窓辺に{立つ／立っている}。

同じく，補語や目的語に現れるときも英語と日本語では違いが生じる。

(3) a. I have {a dog / two dogs}.
　　b. This is a white dog.
　　c. These are two white dogs.

---

[*1] 英語以外の言語では，両数 (dual form) が存在するものもあるが，ここでは深く採り上げないことにする。日本語にも「両手」「両足」のように表現することもある。

(4) a. 犬を（１匹／２匹）飼っている。

b. これは白い（１匹の）犬です。

c. これ（ら）は（２匹の）白い犬（?? たち）です。

いずれの場合も，英語では明確に数が示されているのに対し，日本語では必ずしもそうとは限らない。(2) も (4) も特に一人・二人，もしくは１匹・２匹と述べなくとも意味を伝達することができる。また，(4c) においては，「犬たち」と表記しなくとも複数であることが分かる[*2]。

英語の数については Bond（2005）が，動詞：代名詞：属性：同格：従属の５つに呼応することを述べている。

(5) 数の呼応（Number Agreement）

| | | |
|---|---|---|
| ・The dog takes a bath. | (動詞の一致単数 | verb agreement：sg) |
| ・The dogs take a bath. | (同　複数 | verb agreement：pl) |
| ・The dog took its time. | (代名詞の一致単数 | pronoun agreement：sg) |
| ・The dogs took their time. | (同　複数 | pronoun agreement：pl) |
| ・The dog is a puppy. | (属性の一致単数 | ascriptive agreement：sg) |
| ・The dogs are puppies. | (同　複数 | ascriptive agreement：pl) |
| ・The dog, a dalmation, is friendly. | (同格の一致単数 | appositive agreement：sg) |
| ・The dogs, dalmations, are friendly. | (同　複数 | appositive agreement：pl) |
| ・This dog looks nice. | (従属の一致単数 | dependent agreement：sg) |
| ・These dogs look nice. | (同　複数 | dependent agreement：pl) |

(Bond 2005：19)

上記の一覧の通り，英語の名詞には厳密な単数・複数の形があるのに対し，日本語の名詞には，文法上のカテゴリーとして単複の形がないとされている。従って，数の概念が日本語には存在しないという考え方も存在している。しかし，名詞を数える手段が存在している以上，何らかの数（単数・複数）の概念が存在するはずである。英語の可算名詞は数詞を前に置いて数を数える。不可算名詞においても助数詞（numerative）を使用して数え

[*2] ただし，人以外の犬という名詞に「たち」を付けるのが普通かどうかは疑わしい。

ることもある。

楳垣（1961）では「日本語では，数に対する関心が極めて薄く，漠然と単複未分の考え方・表し方ですませており，必要な時だけ二次的に考え・表すに過ぎない」とし，次のような記述がある。

(6) 複数化しては忘れ，また複数化しては忘れ，結局は単複未分表現に逆戻りするので，これは日本人の数の考え方を明らかに反映しているものと思われる。すなわち，数は常に二次的に考えられるので，名詞の形式で表現するという一次的表現の習慣になれていないからなのであろう。（楳垣 1961：189）

しかし，英語では複数形が数を表しているのに対して，日本語に現れる複数形は，果たして単に数だけを示しているのであろうか。もし数だけを示し，さらに日本人は数に対する意識が弱いだけであれば，複数形は存在しないはずである。

本稿では，日本語の複数形と英語の複数形が，意味上でどのように違っているのか，また両言語の間で，複数形のもつはたらきはどう違うのかを考えてみることにする。

名詞を考える上で，この稿では英語の冠詞については深く触れないこととする。

## 2. 日本語の名詞

### 2. 1. 文法上の数

日本語には文法上の数がないか，概念化されていないとされている（安藤 1996，石綿・高田 1990，外山 1992，千野 1975 他）。日本語の伝統文法ともいえる山田（1936）では，次のような記述が見られる。

(7) 国語の名詞には文法上の数の区別をなすの必要なし。若しその特に多数なることを示さむとせば，その語を重ねて示すか，或は多数を示す接尾辞を添へざるべからず。世の文法学者又名詞の数といふことを説けり。これも西洋文典に心酔したる弊なり。（山田 1936：112）

西洋文典，つまり英語などの諸外国では，単複を明記しなければならないが，日本語には存在しないということである。特に数を述べるときには，畳語や接辞を使うということである。

同様なことが，三浦（1975）にも見られる。

(8) ヨーロッパの諸言語とちがって，文法上の格も，性も，数も，〈名詞〉それ自体には存在しない。格を示すときには「人が」「人の」「人を」のように〈助詞〉を加え，数を示すときには「人びと」「諸事件」「子どもたち」「彼ら」のように〈名詞〉を重加したり〈接頭語〉〈接尾語〉を加えたりする。〈名詞〉それ自体は語形変化しないのである。(三浦 1975：64)

しかし，それは文法の範疇としての「数」であって，実際には日本語でも名詞の数を数えている。ただし，総ての名詞に当てはまるとは限らないようである。楳垣（1961）では，

(9) 日本語でも，名詞での数表現がないわけではない。(中略) 注意すべき点は，第一に，この種の複数表現が用いられる名詞は，主として人間を示すもので，事物を示すものは少ないことであり，第二に英語の‘-s’とは違って，単複未分の形式に接尾辞を付けて複数形だけに限定する表現法である点である。(楳垣 1961：188)

と述べており，何らかの階層が根底にあると考えている。これは Silverstein（1976）に述べられている名詞の階層性にも関連があると思われる[*3]。

潜在意識の中での複数としては，泉井（1987）に以下の記述が見られる。

(10) 一口に複数といっても，その内容は常に流動的である。そこに内包される複数の概念もしくは観念は，われわれの意識にとって確固とした不動のものではない。それはくっきりと顕点化して，きわめて明瞭な複数性をつよく示すこともあれば，またそれが意識の下にまさに没して潜点化されようとしつつ，単数との区別さえ定かではないところの，超数的または没数的なものもある。(泉井 1987：8)

複数という概念は，意識の中に存在しているという考え方である。

日本語の意識の中で複数は，文脈から推測できる。森住（2005）では「犬」を例にとり，「犬を飼っている」といえば普通ならば犬は１匹であるが，デパートで「犬を売っている」といえば複数であることを示している。このように，日本語では文脈が数を握っていると

---

[*3] この階層は，動作者のなりやすさを示すといわれている。「代名詞（一人称＞二人称＞三人称）→名詞（親族名詞・固有名詞＞人名詞＞動物名詞＞無生物名詞）」の順に表れる。

言えよう。類別詞に関する研究の中で，今里（2004）は，「日本語の文脈で現れる名詞は概念を表しており，類別詞の機能はその支持可能な部分としての具体的な構成素を取り出すこと」としている[*4][*5]。

本多（2005）には，「英語は日本語とは異なり，モノ優位の言語である」という記述がある。この記述が示すとおり，一般に会話の中で，ある名詞が存在するか否かを尋ねる際は，まず名詞そのものについて存在の有無を聞き，その後で必要に応じて数を述べる[*6]。

(11) 「兄弟はいますか」
「はい。兄が一人，弟が二人います」

また，買い物などで注文するときも，数より先に名詞を言うことがある。

(12) 「ノートを三冊ください」

このような例からも，数より先に名詞そのものに焦点を合わせるのが，日本語の特徴であると考えることができよう。さらに，日本語は単複の概念を厳密に気にせず，必要に応じて数を補うということが考えられる。

## 2. 2. 日本語の複数形

先に述べたとおり，日本語で複数を表現するには，畳語形や接辞などによる方法がある（仁田 1997，田村 1997 他）。

(13) a. 人々，家々，山々，日々，神々，国々
b. 子どもたち，少年たち，人間たち，息子たち
c. 子供ら，太郎ら，お前ら
d. 皆様方，殿方

---

[*4]「類別詞」とは，「名詞の意味的分類を表す言語手段」と定義されている。詳しくは Aikhenvald（2000）に述べられている。

[*5] 水口（2004a）では，類別詞には二通りあり，一つは文法的な一致を，もう一つは「接辞」の形をとる，とある。

[*6] 英語ならば，“Do you have any brothers or sisters?” “Yes, I have three brothers.” となる。質問の際，“any” で数を尋ねる。

しかし，これら接辞などは，直接文法の範疇に入るとは考えられない。野元（1978）でも述べられているが，畳語はごく限られた和語にしか使えず，複数化することで述語動詞の形が変わることもない。仁田（1997）でも，「畳語形形成は非生産的であり，非規則的である」と述べている。安藤（1996）においても，「無生名詞につけて，*本タチ，*花タチ，*山タチと言うことはできない」と述べられている。名詞の階層性では左側（上位）の名詞にのみ許される形である*7。

また，英語の複数形と比較して，指示内容が異なる場合が見られる。

(14) 「タチ・ラ」が固有名詞についた場合である。「花子タチハ，モウ京都へ着イタカシラ。」の「花子タチ」は「花子」が２人以上いるのではなく,「花子を含むグループ」または「花子とそのグループ」の意味である。しかも，その中には男の子が混じっていてもさしつかえない。対応する英語は Hanakos ではなく，Hanako and others または Hanako and her group であろう。（安藤 1996：5）

「固有名詞＋たち」は，代表とする人物の名（固有名詞）を含む一団と考えられ，固有名詞（をもつ人物）の一団ではない。英語表現での“Hanakos”であれば，「花子という名前の人物」が二人以上いることになる。橋本（1978）でも，「日本語やアイヌ語で「おじさんたち」といったら，それは，三人のおじさんであることもあるが，ふつうは，おじさんとその家族や友人のことである」とあるように，日本語の「たち」には，同質の名詞を複数として扱うのではなく，異質な名詞をも含めた複数となりうるのである。

接辞を使うことによって，述語動詞が変化する場合がある。いわゆる「敬語」表現である（楳垣 1961，野元 1978）。

泉井（1978）において，次のような記述がある。

(15) 複個数的な表現は，日本語においても別の手法によって，統辞法的にあらわれる。「神々」「人々」「山々」「家々」などがそれであって，これらは意味的なその価値判断において第一級のグループに属する存在である。それぞれが個々において鮮明な個性を持ち，またそれぞれの神能，性能，霊能，機能，性格において尊ばれ，あが

---

*7 ただし，擬人化する際には許される。
（例）きれいなお花さんたちね。（安藤 1996）

められる存在である。(泉井 1978：26)

「神々」といった表現は，単数で表されるよりも重い表現となり，敬意をはらっている様子が窺える[*8]。「人々」も敬意が伝わるであろう。逆に，一人称で使用するとその意味が変化する。

(16) 私ども の方で処理いたします。

この形は，私どもという複数形を取ることによって焦点をぼかし，畏怖の念を表現したり，自ら遜って相手を高める働きをしている。(16)は謙譲表現となっている。実際には「私」一人が対応するのかもしれないが，私だけではなく全員がある物事に誠心誠意を持って対応し，相手方に敬意を払う，ということを示している。モノを直示で表現するよりも，複数にすることによって暗喩し，軟らかい表現にしている。

敬語としての複数は，一人称では謙譲を示し，二人称や三人称では尊敬を示すこともある[*9]。人称に関する代名詞は直示的で，しかも人を表している（仁田 1997）という特性があるので，対象をぼかすためには複数化は必要不可欠な配慮であろう[*10]。

## 2. 3. 数表現の特徴

実際に数はどの様に表現されているのか。名詞の数を数えるとき，「助数詞」を使う。これは英語の不可算名詞に似ている部分が見られる。というより，日本語の名詞には文法範疇の数が存在しないのであるから，数えるときに使用することは必然であろう。

水口（2004b）に，

(17) 日本語の名詞は必要がなければ数を指定することなく使われることができ，その場合には可算名詞であれば単数とも複数とも解釈することができる。数量表現が現れて数が指定されると，可算，不可算を問わず，類別詞が数量詞句に義務的に付与さ

---

[*8] 日本は多神教のため，「八百万の神」と言われるが，一神教の宗教の場合は，違う意味になるかもしれない。

[*9] 「お前ら」と二人称を複数にすると，相手を非難する様な感があるが，南（1987）で，相手や話題の人を低める用法を「マイナス敬語」と述べている。相手ではなく「自分を」高く評価することでもあるので，一種の敬語としてもよいと思われる。

[*10] 代名詞の特性についての考察は，次の機会にする。

れなければならない。(水口 2004b：63)

とあるように，そのまま名詞を使えば単・複を問わない名詞も，数量詞を付けることによって複数形の表現となる。

助数詞の特徴は，「～本」「～人」「～冊」に見られるように，数えられる名詞の形状や性質を示している。言い換えると，形を先に表現してから，その名詞を決めている。井上(1999) に述べられているとおり，「助数詞は具現化のプロセスを担っている」のである。しかし，影響を受けるのは形だけではない。

例えば，花は通常「～輪」と数えるが，「～本」と数えることもある。この違いは，花を取り扱う者の状況や立場によって変化する（濱野 2005)。生産者や販売の立場では「本」と数えるであろう。しかし，華道や消費者の立場では「輪」と数えるに違いない。これは生産者が花と茎，葉を含めた形状に注目し，ある程度の長さを持つため「本」と呼ぶと思われる。しかも開花しているかどうかはそれ程問題ではない。一方，華道や消費者は花のみ（華道の場合は違うと思うが）に注目している。しかも，「輪」と呼ぶには基本的に開花していることが条件であろう。

助数詞の発展に関しては，三保（2006）で次のように述べられている。

(18) 日本人は，ものごとの形状・性質・様態などを確かめながら数え，かつ，伝達するという，類別的表現方法（助数詞）を習得した。生活様式が多様化し，社会関係が複雑化していくにつれて情報量は増大し，正確さが要求される。ものごとを類別しながら数えるという方法は，分析的表現方法の一つであり，時代の流れに沿った必然的な情報処理方法でもあった。(三保 2006：215)

名詞を伝達する数が増えるにつれ，助数詞もその表現される名詞の形に伴って増加していったのであろう。

日本語の数表現は，もともと数の概念のない名詞に対して，形や状況を示す語として発展した。そのために，莫大な数の助数詞が登場したと考えられる。名詞の性質を示す語も含まれているので，その呼称によって取り扱われ方も判断できるという，意思伝達の働きもしているのであろう。

## 3. 英語の名詞

### 3. 1. 可算名詞・不可算名詞

石田（2001）で述べられているように，「英語は「数」（number）に関する情報を明確に表示する」言語である。日本語とは違い，英語では「数」が大きな位置を占める。数えられる名詞が可算名詞，数えられない名詞が不可算名詞である。可算名詞とは，「特徴的な輪郭・境界線をもっていて，周囲から区別される必要がある〈モノ〉」（野村 2005）であり「空間的，時間的，質的な境界線」をもつ（ibid.）。また「不可算名詞とは特徴的な輪郭・境界線をもたず，内部が均質な〈物質〉」（ibid.），または「最小の部分を考慮することなく，全体と部分の関係を持つもの」（水口 2004a）を指す。

可算・不可算の別をまとめると，

(19)・可算名詞：特徴的境界線をもつモノを表す。

a. 空間的境界線（例：cat, bicycle）

b. 時間的境界線（例：beep, flash）

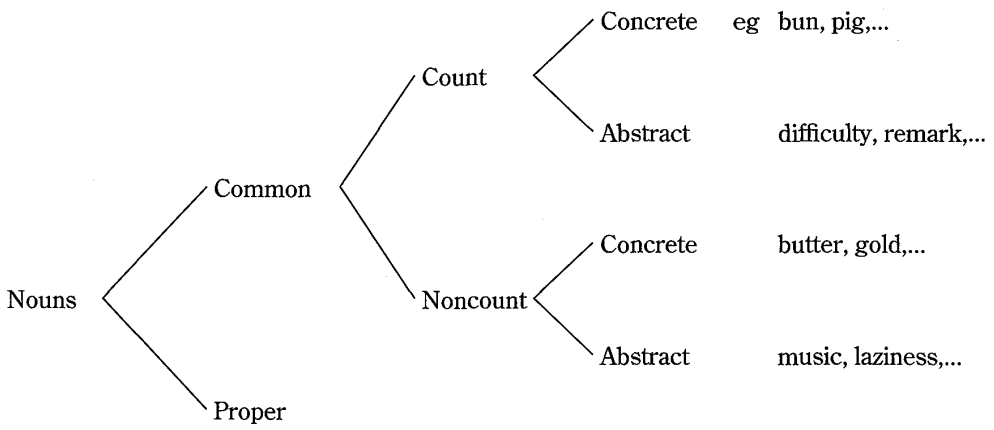
c. 質的境界線（例：fine wine, tasty beer）

・不可算名詞：特徴的境界線をもたない，内部が均質な物質を表す（例：water, air）

（野村 2005：14）

となる。また，学校文法などでは固有名詞を不可算名詞に区分しているが，Greenbaum & Quirk（1990）では，まず一般名詞と固有名詞を区分している。

(20)




（Greenbaum & Quirk 1990：70）

可算・不可算それぞれに，具体名詞，抽象名詞と区分されている。

集合名詞が可算になるか不可算になるかに関して，高見（2005）は明確な形，境界に注目し，連続体を示す集合体は数えることができず，明確な形や境界をもつ集合体は数えることができる，とまとめている。

(21) (A)集合体の成員が，それぞれ単一体を成すと認識されるもの（ゆえに*much... と言えない）… team, committee, crowd, people など

a. 集合体を表す集合名詞では数えないもの … team, committee, crowd（ゆえに*ten team, *many team 等は言えない）

b. 集合体を表す集合名詞で数えるもの … people（ゆえに ten people, many people と言える）

(B)集合体の成員が，連続体を成すと認識されるもの（ゆえに much... と言える）… family, furniture, cattle, audience など

a. 集合体を表す集合名詞では数えないもの … family, furniture, audience（ゆえに*ten audience, *many audience 等は言えない）

b. 集合体を表す集合名詞で数えるもの … cattle（ゆえに ten cattle, many cattle と言える）（高見 2005：33）

集合を示す事象が，「単一体」なのか「連続体」なのかにより，可算・不可算が分けられるということになる。

ピーターセン（1990）にもある通り，可算・不可算は意識の違いによる。つまり実際の数や量よりも「ものを一つ一つとして意識する意味があるかどうかという問題」である。

可算・不可算の概念は，物事を全体として捉えるか，個別として捉えるかによって異なるのである。

### 3. 2. 単数・複数

単数及び複数の形があるのは，当然ながら可算名詞である。安井（1983）にもあるように，「英米人が英語の名詞を用いるとき，単数形であるか，複数形であるかのいずれかを必ず用い，それ以外の形を用いることは許されない」とされる[*11]。

複数の概念は，「英語の名詞の複数化は個体からそれらを含む集合を生成することに相

---

[*11] 安藤（2005）では，OE には両数（dual）が存在し，both, either, neither などはその概念上の対応物である（同 396）とある。

当」（小林 2004）する。一つの個体と認識されるモノが，二つ以上（正確には一つより多くであろう）認識される集合体が複数である。

また，語自体の意味は複数でありながらも，単数の形で表現される名詞も存在する。単複同型（Zero plural）で示される，一部の動物などである。

(22) a. This sheep has just had a lamb.
b. These sheep have just had lambs. （Greenbaum & Quirk 1990：95）

動物や個々の個体を示す昆虫などを指すときは，一つの集団として認識されるため，単数で表される。ただし，この稿では，単数形の考察については深く述べないこととする。

通常複数形で用いられる名詞がある。二項名詞（Binary nouns）がそれに当たるが，これらは対の概念として用いられる。衣服を表す名詞や，道具を表す名詞がある。

(23) a. jeans, pants, trousers,...
b. binoculars, forceps, scissors,... （Greenbaum & Quirk 1990：98）

また，群名詞（Aggregate nouns）と呼ばれる，不特定の数の部分から成り立つ名詞も複数で表す（Greenbaum & Quirk 1990）。

(24) arms, communications, data, goods, media, outskirts, remains, troops, works,... (ibid.)

(23)の二項名詞は，複数と言うより，むしろ両数の名残であると考えられる。ジーンズもズボンも，または双眼鏡やピンセットも一対で一つの名詞を示している。(24)の群名詞も，単体では本来の使用目的に当たらないものである。例えば通信は相手が存在しなければ成立しないものである。

安藤（2005）では，注意する複数形として例を挙げている。それを下のようにまとめてみることにする。

(25) ［A］複合語の複数形
［B］絶対複数（plurale tantum）
①対の部分からなる衣類・器具

②-icsで終わる学問名

③その他

a. 身体の部分

b. ゲーム

c. 病気

d. 場所・建物

e. その他

［C］強意複数（intensive plural）

①抽象名詞の場合は，程度の強大さを表す

②具象名詞の場合は「広がり・重なり・連続」を表す

［D］相互複数（plural of reciprocity）

［E］二重複数（double plural）

［F］分化複数（differentiated plural）

［G］on all fours（四つんばいで）　　（安藤 2005：402-406）

［A］の複合語と［G］の「四つんばいで」を別とすると，その他の複数にはある程度の特徴が見られる。対の表現については言うまでもないが，いずれもその名詞単独で使用される語ではなく，何らかの状況において一方的な使用がなされないモノを表している。また，学問の様に連続性があるモノもそうである。さらにはひとかたまりの集団性を表すモノも複数形になりうる。

単数形は，概念から個別化されたモノが単体で認識される名詞と考えられる。対して複数形は，対となるモノか，それ以上の数が認識された形となる。二項名詞や絶対複数などの形は，常に対となって存在し，単体ではその役割を果たすことがないか，単体では扱うことができないモノを示す。これはむしろ集合名詞のような役割を担っているであろう。

### 3. 3. 不可算名詞の助数詞

可算名詞は，数詞をそのまま名詞の前に付けることによって，数を表し複数化することができる。しかし，不可算名詞はそれ自体数を数えることができない。固有名詞は唯一（とされる）存在するモノを述べ，抽象名詞では形そのものを見ることができない（ただし，日本語では抽象名詞を，「３本の情報」や「10大ニュース」の様に数える表現がある）。

物質名詞については，その物質を取り扱うモノ，または物質が変化した（形として切り取られた）後に，代わりとなる名詞を使って数えることができる。言い換えると，助数詞

を使って数えることができる。

(26) a. I drank two glasses of water.
b. I ate two pieces of cheese.

“water”や“cheese”自体は不可算のままであるが，“glass”や“piece”という名詞は複数形になる。“glass”は“water”を飲むのに使用した道具であり，“piece”は“cheese”を切り取った後の形である。このような表現は，日本語と似た構造となっている。

不可算名詞も，可算名詞のように複数形を取ることがある。Greenbaum & Quirk（1990）によると，

(27) Both quantity and quality partition may be expressed by treating the noun itself as though it expressed a quantity or quality. Thus a noncount noun can be given count characteristics and *two coffees* may in appropriate contexts mean either ‘two *cups of* coffee’ or ‘two *types of* coffee’.

というように，名詞そのものが持つ性質から，（上のコーヒーの場合）「２杯」または「２種類」という意味を持つことになる。これは文脈から推測する日本語の場合と似ている。

不可算名詞を数える場合は，可算名詞に一度置き換えてから数える。そのため，置き換えられた可算名詞に影響を受けるため，数え方は一通りではなく，その都度変化することになる。また，(27)の様に可算名詞に置き換えずに可算として扱うときは，文脈による判断が必要となる。不可算名詞は元々一定の形が存在しないので，何通りにも数えることができるのである。

## 4. 表現の差異

### 4. 1. 可算と不可算の概念

英語では，漠然とした概念から事象を取り出すのに数を数える。それがはっきりとした形として現れたとき，可算名詞になると考えられる。不可算名詞は，明確な境界がないので数えることはできないが，道具を使ってはっきりと区別したときに，その道具を使って数える。または，変化した後の形を見て数える。全体の漠然とした中から具体化させるときには，複数となることもある。ただし，その場合は一通りの解釈ではなく，名詞自体が持つ性質によって多義的になることもある。

一方日本語では，元々個々に取り出すということには視点が置かれなかった。このような考え方は，§ 3. 3で見えるように，日本語と英語の不可算名詞は似ているように思える。しかし，個々としては数に関心を持たない日本語でも，数を伝える必要性が出てきた。そこで使用されるのが「類別詞」である。今里（2004）で，

(28) 結局，名詞の数概念を表現する場合，二つの類型では文法の表現手法は全く異なってはいるが，人間にとって基本的な認知能力である「個別性」「境界」および「図地関係」がどちらの言語でも共通して使われている要因であるといえる。（今里 2004：55）

と述べられるように，「個別レベル」，「境界」，そして「図地関係」が大きく左右されている。指し示す名詞がどの様なものか，どの様な性質を持つのか，どの様な形をしているのか，または用途は何かという条件を満たす助数詞が考案されたのである。

さらに，日本語名詞では「敬語表現」を示すためにも複数形が使われていると考えることができる。相手の立場を高めたり，自ら立場を低めたりする働きを持つ。つまり，「立場による分類」も関係してくると言えるであろう。

日本語と英語の複数形表現をまとめると，次のようになる。

(29) ①英語は，まず数が存在する。抽象的なものでさえ，目に見える道具などを使って具体化し，数を数える。また，対の概念があるもの，一方的には使用することができないもの，そして連続性を持つものは複数形で表現する。

②日本語数は，単数形で表されても文脈から単数か複数を推測することができる。必要に応じて複数形を取る。その際，まず形から判別して，その形を数える。数える基準は，性質であったり，用途であったりする。また，直示を避けるために複数形にし，対象をぼかして暗喩することもある。

### 4. 2. 数 と 形

英語は個体を分別するため，数を数える。

今里（2004）では英語を類別詞言語と考え，数の概念は，「構成素の個別性レベル」にあるとし，以下のように定義している。

(30) （Ⅰ）非類別詞言語における「個別性レベルの法則」

非類別詞言語では，名詞の指示対象の個別性レベルに従って名詞を分類し，その分類ごとに数を文法に反映させる。（今里 2004：46）

名詞の持つ特性から分類し，数を数える。可算名詞は目に見えたまま数えることができるが，不可算名詞の場合は，何によって分けることができるか，その分け方を使い分類し，複数化する。黒川（2004）の記述の中に，

(31) 商品として加工される以前の材料でさえ無料なものはこの世にはほとんどない。有料であるということは量られ計算されるということである。英語は物質それ自体と商品とを厳密に区別して言葉を使い分ける言語である。日本語は英語とは対照的な言語であるが，英語においても物質が値段を必要とする商品に変われば，当然それは数えざるをえない。そうでなければ売買が成り立たない。ただし数えるための文法法則があって，ただ数字を付せるだけでは済まされないのである。それらは，周知の通り以下のような形態を取って「数えられる」言葉に転化するのである。（黒川 2004：274）

とある。本来物質名詞は数が話題になることはない。しかし，原材料が商品化されたとき，売買目的で数えるようになった。そのため，助数詞が必要になったということである。

英語が可算・不可算を問わず数にこだわるのに対し，日本語は数に重点を置かず，むしろ形にこだわる。

上述した今里（2004）では，日本語を類別詞言語とし，次のように定義している。

(32) （Ⅱ）類別詞言語における「個別レベルの法則」

類別詞言語では，名詞が指示可能な具体的対象の構成素の個別性レベルに従い，類別詞を分類し，次にその類別詞によって，名詞が分類されるという２重構造をもつ。（今里 2004：52）

(33) （Ⅲ）類別詞言語における「図地関係の法則」

類別詞言語では，名詞は概念・カテゴリーを指示し，常にこれを「地」と認識し，「図」としての具体的な構成素を個別性レベルに従った各類別詞で具体化して取り出す。（今里 2004：53）

日本語では，類別詞と名詞が深い関係を持っているということである。日本語類別詞は，「名詞の指示する概念やカテゴリー全体から，構成素である具体的単位を取り出すこと」(ibid.）がひとつの機能とされる。

日本語は，数はそれ程重要な情報ではないようである。しかし，英語と同様に個体を分別するために数を数える。しかし単に数の多少を述べるだけではない。数もさることながら「形」や「立場」をも考慮し，必要に応じて複数形を取るのである。

## 5. ま と め

英語における複数表現は，「数」が重要となる。可算名詞か不可算名詞かの違いは，その名詞が可視性・性質・概念・材料などにより単・複が決定される。複数になりうる名詞は可算名詞とされ，まず数を表現してから名詞を述べる。

不可算名詞でさえ，助数詞を用いてその道具，形状などによって数を数える。しかも，その道具や形状が複数化される。単独では使用不可能なモノや，連続性を持つモノも複数化される。たとえ性質や形がどの様なものであっても，まず数ありきとされる。英語にとって数とは，名詞に先立って表現される，重要な情報なのである。

日本語の複数表現は，英語と違い単純に「数」を表すためのものではない。そもそも，数を表現するより先に，名詞が何を示すのかに注目している。数の情報は，文脈から察することもあれば，実際に目で見て確認することもある。必要であれば後から情報を求めることもある。また，複数であることを述べるのに，畳語や接辞を使用するが，これらは人間を中心とした名詞に用いられ，それ以外ではあまり目にすることがない。一般名詞を擬人化するときには使用されるが，限られた文脈からである。

日本語で複数表現をするときの特徴は，名詞が複数存在することを述べるのは当たり前であるが，「立場」や「形」を表現することも考えられる。その表現方法の一つが「敬語表現」であり，複数化することによって対象物をぼかすはたらきをしている。

日本語は，数より先に形が優先される。そして，その形から助数詞が決定される。つまり，日本語にとっては数よりも形が重要な情報であるといえる。

## 参考文献


Aikhenvald, A.（2000） *Classifires: A Typology if Noun Categorization Devices*, Oxford Univ. Press

安藤貞雄（1996）『英語の論理・日本語の論理　―対照言語学的研究―』，大修館書店

安藤貞雄（2005）『現代英文法講義』，開拓社

Bond, Francis（2005） *Translating the Untranslatable: A Solution to the Problem of Generating English Determiners*, CSLI Publications

千野栄一（1975）『言語学の散歩』，大修館書店

Greenbaum, S. & Quirk, R.（1990） *A Student's Grammar of the English Language*, PEL

濱野寛子（2005）「助数詞の選択と対象の捉え方について」『日本語用論学会　第８回（2005年度）大会　予稿集』，日本語用論学会

橋本萬太郎（1978）「性と数の本質」『月刊言語』Vol. 7 No. 6：2-12，大修館書店

本多啓（2005）「〈日英対照〉物の数の捉え方に原則はあるか」『英語教育』第54巻第７号：10-12，大修館書店

今里典子（2004）「非類別詞／類別詞言語を決定する要因について」，西光義弘・水口志乃扶（編）『類別詞の対象　シリーズ言語対照　〈外から見る日本語〉３』：39-57，くろしお出版

井上京子（1999）「助数詞は何のためにあるのか」『月刊言語』Vol. 28 No. 10：30-37，大修館書店

石田秀雄（2001）「英語における「数」の問題」『英文学会誌』第46号：113-122，大阪教育大学英文学会

石綿敏雄，高田誠（1990）『対照言語学』，おうふう

泉井久之助（1978）『印欧語における数の現象』，大修館書店

小林昌博（2004）「数量詞の形式と量化の領域：日英語の対象の観点から」佐藤滋・堀江薫・中村渉（編）『対照言語学の新展開』：125-135，ひつじ書房

黒川泰男（2004）『英文法の基礎研究　日・英語の比較的考察を中心に』，三友社出版

三保忠夫（2006）『数え方の日本史』歴史文化ライブラリー210，吉川弘文館

南不二男（1987）『敬語』岩波新書（黄版）365，岩波書店

三浦つとむ（1975）『日本語の文法』，勁草書房

水口志乃扶（2004a）「「類別詞」とは何か」，西光義弘・水口志乃扶（編）『類別詞の対象　シリーズ言語対照　〈外から見る日本語〉３』：3-22，くろしお出版

水口志乃扶（2004b）「日本語類別詞の特性」，西光義弘・水口志乃扶（編）『類別詞の対象　シリーズ言語対照　〈外から見る日本語〉３』：61-77，くろしお出版

森住衛（2005）「文法にあらわれた日英語発想法の比較」，日英言語文化研究会編『日英語の比較　発想・背景・文化』：103-110，三修社

仁田義雄（1997）『日本語文法研究序説　―日本語の記述文法を目指して―』，くろしお出版

野元菊雄（1978）「日本語の性と数」『月刊言語』Vol. 7 No. 6：14-19，大修館書店

野村益寛（2005）「可算名詞と不可算名詞の考え方」『英語教育』第54巻第７号：13-15，大修館書店

ピーターセン，マーク（1990）『続・日本人の英語』，岩波新書

Silverstein, M.（1976） *Hierarchy of features and erfativity*, Grammatical Categories in Australian Language

高見健一（2005）「「集合名詞」は数えられるか？」『英語教育』第54巻第７号：30-33，大修館書店

田村道子（1997）「英語と日本語に於ける数の概念の相違」『関東短期大学紀要』第42集：1-7，関東短期大学

外山滋比古（1992）『英語の発想・日本語の発想』NHKブックス645，日本放送出版協会
楳垣実（1961）『日英比較学入門』，大修館書店
山田孝雄（1936）『日本文法學概論』，宝文館出版
安井稔（1983）『英文法総覧』，開拓社